

同志社大学設立支援の現実

——誰がいかほどの寄附をなしたか——

田 中 智 子

はじめに

1880年代に同志社が「大学」設立運動を繰り広げたこと、新島襄が死の間際までこの事業に精魂を傾けていたことは周知の事実である。新島逝去を伝える種々の新聞雑誌は、彼が殊に「大学」設立に苦心し志なかばに世を去ったことを、もれなく強調している。だが、この運動の核となる募金活動の実証分析はさほど進められてこなかった。理由は複数の側面から考えるが、寄附の実態や全体像の不明瞭さが一因であることは間違いない。同志社社史資料センターが所蔵する関連簿冊類の全容が不明である上に、同内容の記載を含む類似の簿冊が複数存在し、相互関係がわかりにくい。また高久嶺之介が指摘するよう⁽¹⁾、個々の簿冊の記載に関しても、金額や寄附者名に意味のとりづらい確認印が伴うため、本当に寄附が行われたのかどうか、にわかには判別がつかない。このような厄介な史料上の問題が、大学設立募金問題への取り組みに二の足を踏ませてきた。

筆者はここ数年、同志社による「大学設立運動」の分析に継続して取り組んできたが、さまざまな情報が交錯する計10冊以上の関連簿冊のうち、ある一簿冊が、寄附の実態を総決算的に示す基礎データであると捉えるに至った。1897年に同志社資産管理委員によって作成された『社務第参拾五号 明治三十年一

月調製 各府県別調 同志社大学義捐金者名簿』(以下、『明治三十年名簿』と略)がそれである。この簿冊をひもとくことにより、上記の高久の論点に対しても、ある程度は答えを出すことができる。

また昨年(2016年)秋、社史資料センターに関連簿冊の出庫を再度依頼したところ、あらたに『社務第参拾六号 明治三十年一月調整 同志社大学義捐金参考書』との表題をもつ簿冊を閲覧することができた(以下、『明治三十年参考書』と略)。教会・新聞社・個人などから寄せられた雑多な書類を、「第〇号参考書」と順に名付けて合冊したものである。上記の『明治三十年名簿』と同じく同志社資産管理委員の作成と書かれ、表紙の筆跡や形式も同じであることから、2冊はセットで作製されたものと推察される。

筆者は並行して、同志社側の簿冊が逐一記録しない寄附が多額・多数口存在することに着目し、その実態の解明に努めてきた。それは新聞雑誌を受付窓口とした寄附であり、協力した新聞雑誌社は、東京・関西圏を主としながらも全国に点在し、20社を超えた。寄附者や寄附額は、それぞれの媒体上にその都度掲載される。その寄附実態を把握すべく各紙誌記事の通時的検索を行ってきたが、先述した『明治三十年参考書』には一部の媒体が作成・送付した寄附明細が含まれていることが判明し、記事そのものとのつき合わせによるより正確な実証も可能となった。⁽²⁾

以上の経緯を踏まえ、本稿では『明治三十年名簿』と『明治三十年参考書』を最終決算的な基本史料と位置づけ、他の簿冊や新聞史料と併用しつつ、次の課題に取り組む。

まずI章において、従前の拙稿では未検討の、第二回同志社大学設立義捐金募集(1889年5月～11月、以下「第二回募金」)における各新聞雑誌社の動向を整理して示す。これによって、新聞雑誌社を通じた寄附実態についての筆者の考察はほぼ完了することになる。行論の根拠を示すべく、「〔第二回同志社大学義捐金〕新聞雑誌別総覧」を末尾に示した。以前より二度にわたり、新聞雑

誌上にあらわれた寄附の実態をリストアップしてきたが、今回をもってほぼ網羅的に示したことになる。⁽³⁾

続いて第II章において、寄附が同志社でどのような態勢下に受け付けられ、どのくらい実績を挙げたのか、制度と数字を段階的に把握する。その上で、同志社大学創設のために誰がどのように金銭的協力を行ったのか、多額寄附者や著名な有力者を対象に概観する。

最後に「おわりに」において、これまでの実証成果をふまえ、同志社大学設立募金運動の特質を端的にまとめることを目標とする。

なお、本稿に先立つ大学設立募金運動関連の拙稿は、①東京の新聞雑誌と関西以外の地方紙、②関西の新聞、③キリスト教勢力、以上の三方面からそれぞれの支援実態に着目したものであり、本稿ではすべて、論考タイトルの一部を採って、①を「スケッチ」、②を「京阪神」、③を「キリスト教界」と略記する。⁽⁴⁾

I 新聞雑誌社による「第二回募金」

1 開始の経緯

1888年11月、諸新聞雑誌の「同志社大学義捐金募集取扱広告」掲載から始まった募金は、1889年4月末日を期限と定めていた（以下「第一回広告」「第一回募金」と略）。しかし期日が迫るなか、各社の受付期間をさらに延期し、5月1日から11月30日までと定める二回目の取り扱いが開始された（以下「第二回募金」と略）。

「第一回募金」は、徳富蘇峰が主宰する『国民之友』が中心となり、東京の新聞雑誌社が連名で呼応した協同的運動として広がった。関西の新聞社もほぼ同時に動き出したが、連名形式ではなく、各紙が個別に広告を掲載して窓口となった。一方「第二回募金」に関しては、特に『国民之友』の主導性は窺われず、新聞社連名での動きも、むしろ関西の方に早く確認できる。

すでに1889年4月の終わりから、関西の各紙において「第二回募金」の開始は予告的に報じられていたが（『神戸又新』4.27、『大阪毎日』4.28〔以下、新聞を典拠とする場合は、このように略紙名と発行日を本文中に注記する〕）、どこよりも早く正式な広告を掲載したのは『神戸又新日報』で、4月30日に単独社名の「社告」として「同志社大学第二回義捐金募集広告」⁽⁵⁾を掲載した。翌5月1日になり、大阪の大阪朝日新聞社・大阪毎日新聞社・東雲新聞社・大阪公論社、京都の京都中外電報社・日出新聞社・京都日報社・神戸の神戸又新日報社の8社名が並ぶ「同志社第二回義捐金募集」の広告が、『大阪朝日新聞』・『大阪毎日新聞』・『中外電報』・『日出新聞』・『神戸又新日報』に一斉に掲載された（以下「第二回広告」）⁽⁶⁾。

表1に示したごとく、東京についても、5月の半ばから、報知社・毎日新聞社・朝野新聞社・東京公論社・東京新報社・三益社・東京朝日新聞社・江戸新聞社・経済雑誌社・嚶鳴社・警醒社・女学雑誌社・民友社の13社に前掲の関西8社を加えた計21社連名による「第二回広告」が、各紙に掲載されていった。

文章や様式は、関西8社のみのものも、東西21社によるものも同じである。寄附を受けた各社の紙上にその金高と姓名を掲載して別途受領証は出さないこと、義捐金は10銭以上に限るとしたことなど、「第一回募金」をそのまま踏襲しているが、前文は第一回と異なってシンプルであり、新島襄の名や意図についての再説明はない。次にこれを掲げておく。

同志社大学義捐金の第二回募集取扱広告

同志社大学義捐金取扱期限は四月限の処地方有志者にして当時募集中のもの有之趣に付き更に五月より十一月まで第二回募集取扱期限とし引続き取扱候間右大学設立賛成の諸君は多少に拘はらず金円相添へ左の各社へ御申込被下度候

〔以下、「第一回募金」と同様の受領方法・金額期限等の定めと各紙誌名列記〕

表1 同志社大学設立「第二回募金」取扱新聞雑誌社一覧

新聞雑誌社名	紙誌名	広告初回掲載日	連名社名
報知社	『郵便報知新聞』	5月12日	全
毎日新聞社	『毎日新聞』	5月24日	全
朝野新聞社	『朝野新聞』	5月11日	全
東京公論社	『東京公論』	—	—
東京新報社	『東京新報』	—	—
三益社	『改進黨新聞』	—	—
東京朝日新聞社	『東京朝日新聞』	5月12日	全
江戸新聞社	『江戸新聞』	—	—
経済雑誌社	『東京経済雑誌』	5月11日	全
嚶鳴社	『東京輿論新誌』	5月1日	東
警醒社	『基督教新聞』	5月15日	全
女学雑誌社	『女学雑誌』	5月18日	全
民友社	『国民之友』	5月22日	全
大阪朝日新聞社	『大阪朝日新聞』	5月1日	西
大阪毎日新聞社	『大阪毎日新聞』	5月1日	西
東雲新聞社	『東雲新聞』	×	×
大阪公論社	『大阪公論』	—	—
京都中外電報社	『中外電報』	5月1日	西
日出新聞社	『日出新聞』	5月1日	西
京都日報社	『京都日報』	—	—
神戸又新日報社	『神戸又新日報』	5月1日 (4月30日)	西(自)
福岡日日新聞社	『福岡日日新聞』	5月1日	自
海南新聞社	『海南新聞』	×	×
土陽新聞社	『土陽新聞』	×	×
北海道毎日新聞社	『北海道毎日新聞』	(5月2日)	(自)

基本的に「第二回広告」掲載の順による。×は広告掲載がないことを、—は紙誌面閲覧が不可能で確認がとれなかったことを示す。「全」は東西21社名が並ぶ広告、「東」は東京のみ、「西」は関西のみ、「自」は自社名のみをの広告を示す。

要するに、「地方有志者」の活動による寄附継続を見込んだ半年余りの延長呼びかけであった。

すでに拙稿「京阪神」でも指摘したように、「第二回募金」は、新聞社側の完全な自主性によるとはいえず、新島襄の依頼が背後にあったの動きであった。新島の筆になる、大阪・京都・神戸の新聞社をあてにした「第二回広告」原稿

も残り、その強い主導性が感じられる。また4月21日には、神戸又新日報社の村上定より、関西地方の新聞社員の懇親会が開かれる旨が新島に知らされていた。続いて大阪の諸新聞には、新島の下にいた永岡喜八を通じて広告が依頼されたらしい⁽⁸⁾。

6月27日、新島の日誌には、関西の諸新聞記者を招いて卒業式への臨参を乞い、夕刻は中村楼にて平素の好意に対する謝恩会を開いた旨が記されている⁽⁹⁾。『大阪毎日新聞』の木内伊之介、『中外電報』の雨森菊太郎、『日出新聞』の服部直、『京都日報』の梶原保人、『神戸又新日報』の村上定が集まり、『大阪公論』と『大阪朝日新聞』からは参加がなかったが、『東雲新聞』の中江兆民については代理人として京都の宮城幸太郎が出席したとある。このことから、新島が関西の新聞各社に期待を寄せ、その存在を重んじていたことがわかる。

2 各紙誌の協力姿勢

続いて、この「第二回募金」における各社動向の特徴を捉えておこう。

先に拙稿「キリスト教界」での指摘を繰り返しておく、全体として「第一回募金」より低調であったが、そのなかで『国民之友』『基督教新聞』の働きが大きく、特に『基督教新聞』は『国民之友』をしのぐ額を集め、組合教会系以外のキリスト教勢力からの窓口として機能した。ここでは両紙以外の新聞雑誌について検討する。

(1) 関西

募金成果を挙げたのが『京都日出新聞』・『中外電報』と『大阪朝日新聞』および『神戸又新日報』であり、『大阪毎日新聞』と『東雲新聞』の実績が低調(ほぼなし)である点は、「第一回募金」と同様の傾向である。

『日出新聞』や『中外電報』についていえば、府下郡部からの義捐窓口としての役割を担った第一回時の性格は特段認められず、全体としては落穂拾いといったところであろうか。

京都の倍以上の実績を上げた『大阪朝日新聞』は、従前のごとく、近畿圏のみならず四国・山陰・九州と広く西日本からの寄附を受け付けている。また、キリスト者が多いのも引き続いての特徴であり、拙稿「キリスト教界」でも挙げた今治教会とおぼしき集団のほか、高松基督教会、赤間ヶ関一致教会、宝塚温泉場のキリスト教徒たちからの寄附が認められる。

また『大阪朝日新聞』は、募金にまつわる事務手続きを確実に行き公にした点では、新聞雑誌社中、群を抜いていた。「第一回募金」の期限終了間際にも、「以後ハ一切取扱不申」と明記した「義捐金締切予告」を出し（4.28）、新島からの5月15日付「寄附金受取証」を掲載した（5.21）。「第二回募金」についても、11月末日の締切が迫ると、「同志社義捐金募集締切広告」によって期限以降は受け付けられない旨を周知し（11.29）、社告として、新島名12月16日付の「丙第五八号 寄付金領収書」をそのまま掲載している（12.19）。

『大阪朝日新聞』と並ぶ成果をもたらした『神戸又新日報』は、5月28日より6月22日に至るまで、「第一回募金」の会計報告「同志社大学義捐金第一回報告」（以下「第一回報告」、後述）を10回以上も掲載すると同時に、「第二回募金」を積極的に進めた。実際の寄附者を見ると、出石からの集団寄附（11.5）を除けば、主として神戸教会関係者の受付窓口として機能していることがわかり、教会の同一人物から何度も寄附を受け付けたことも確認される。すでに拙稿「京阪神」において、『神戸又新日報』のキリスト教界との親和性は指摘したが、その傾向はさらに「第二回募金」において認められる。

『神戸又新日報』は、受付窓口を務めるかたわら、「慶応義塾と同志社学院」と題する記事を掲載した（6.30、7.2）。執筆は社主の村上定かどうかは確定できないが、「日本帝国に二大学の創業を見んことを期するものなり」とし、現在は同志社への募金を進めているが、慶応義塾の大学設立資金募集にも社として着手する準備があると述べる。そして「二学校の教育主義が並び行われて初めて、東洋の文明国たることを期することができる」との認識を披露する。

また二校の「教育主義」については、慶応義塾は物質的教育に偏し、同志社は精神的教育に偏するの傾向なきにあらず、とする。福沢を「物質教育」、新島を「精神教育」と捉える立論は、すでに発表されていた徳富蘇峰の有名な論説「福沢論吉君と新島襄君」（『国民之友』第17号、1888年3月2日）におそらく依拠した枠組みである。慶応の営みを等しく支持しながらも、新島の説明に紙面を割き、福沢と並び立てることで積極的な支持の論陣を張ったものといえよう。

（2）東京

一方、『国民之友』と『基督教新聞』を除く東京の新聞雑誌社であるが、「第二回募金」の宣伝は行うものの、全体的に窓口としての実質的成果は挙がらなかった。

宣伝について一点触れておくならば、『東京輿論新誌』が、東京の会社としては異例の5月1日に、東京の各社の連名による「同志社大学第二回義捐金募集取扱広告」を掲載していることは目を引く。「第一回広告」と文面は同じ、期日を4月30日から11月30日に変更しただけで、連名で挙がる諸社名も同一である（表1の報知社から民友社まで〔ただし女学雑誌社を除く〕）。このような広告は他に例を見ず、関西で同日に掲載された広告とも異なる。「第二回」へと募金期間を延長する方針を耳にし、独自の判断で、「第一回広告」を転用した広告を作成して掲載した可能性が高い。

『東京輿論新誌』は、政論誌が必要とされない時代の流れの中で10月30日に廃刊となるが、同志社の大学設立募金を応援する「第二回広告」は毎月1回ほどのペースで掲載され（6.5、7.24、8.14、10.23）、廃刊号の前号でも紙面を与えたことになる。また、東京の媒体にはめずらしく、関西の新聞のようなJ. N. ハリスの寄附に関する報道もあった（5.22。『大阪朝日』5.16、『大阪毎日』5.27）。筆者は拙稿「スケッチ」において、「第一回募金」時の対応にみる『東京輿論新誌』の運動への関与を「お付き合い」程度と評したが、「第二回募金」

の時期についていえば、個別寄附の受付記録はないものの、他紙誌と比べても好意的な態度を示したものと捉え直しておこう。

(3) その他の地域

「第一回募金」においては東京・関西の新聞社のみならず、独自にこれに協力した地方紙が複数存在した。窓口となったことを確認できるのは、『海南新聞』『土陽新聞』『福岡日日新聞』『北海道毎日新聞』の4紙であったが、このうち、5月以降の継続的活動が認められるのは、『福岡日日新聞』と『北海道毎日新聞』である。

『福岡日日新聞』は早くも5月1日、自ら「同志社大学義捐金第二回募集取次広告」を作成して単独社名で掲載し、11月30日を締切とした取り次ぎの継続を報じた。その広告は9月になっても掲載されていた(9.3)。かたや「特別広告」として、一社単位での「同志社大学第一回募集決算報告」を作成・掲載した点も独特である(6.14)。「北海道毎日新聞」は「第一回募金」の5月15日への期限延長を自主的に行った新聞であったが(5.2)、「第二回募金」とは銘打たなかったにもかかわらず、以後しばらく受け付けた模様で、9月中旬までの募金記録が認められる⁽¹¹⁾。新規の寄附はいずれも浦河のキリスト教徒であった(8.29、9.10)。

以上、「第二回募金」における各紙誌の動向を検討した。「第二回募金」の結果については、「第一回募金」時のような、各社の実績を一覧化した新島文責の広告文は作成されず、各社から個別に同志社に報告されるにとどまった⁽¹²⁾。12月に、神戸又新日報社120円45銭、中外電報社26円40銭、日出新聞社28円68銭、大阪朝日新聞社139円80銭と記録されている。ただ『神戸又新日報』については、「申込高」「払込高」の問題を考慮する必要があるのだが、これについては後で触れよう⁽¹³⁾。

いずれにせよ、「第二回募金」について、東京での一般紙誌の実績はほぼなく、成果は関西に集中した。京都のように地域からの寄附も引き続き行われた

が、大阪・神戸に関しては、主としてキリスト教勢力からの寄附の窓口となったこと、そちらの額の方が多額・多数口であったことを指摘できる。したがって『国民之友』『基督教新聞』の動向とも考え合わせると、全体として、1889年5月以降の新聞雑誌社経由の寄附は、主にキリスト教勢力からのそれへと収斂したと理解することができる。

II 募金事務の実際と募金の成果

1 態勢・方法

1884年4月、京都府下の有力者が「明治専門学校」設立有志者として京都商工会議所に集まって規則を定め、不可動の目標額を70,000円と掲げた。これが後に、「大学」設立募金の始期と位置づけられる集会であり、新島襄と山本覚馬が発起者とされた。⁽¹⁴⁾

1889年11月に「大学」と銘打っての「第一回募金」が始まると、先述の「第一回報告」にみるように、新島襄自らが「大学設立発起人」として領収書発行主体となった。1890年1月に新島が世を去った後は、金森通倫が領収捺印を行い、現金を収入することとなった。⁽¹⁵⁾

組織レベルで見れば、1884年には、本部を上京第廿二組松蔭町新島方とする「創立事務所」（「創立事務本部」）の設置がうたわれ、後にこれがそのまま、「同志社大学創立事務所」へとスライドしたものと思われる。事務所の「書記」として、廣瀬源三郎が寄附の記録・連絡その他の実務を担っていたが、新島死後の1890年10月以降、寄附は同志社会計局の取り扱いを受けることになる。⁽¹⁷⁾

1891年春以来、社員の湯浅治郎が同志社の主務となり、事務整理に執掌した。⁽¹⁸⁾ 続いて1892年の社員会が決議した規約に基づき、同志社の資産は、湯浅治郎・中村栄助・松山高吉が資金管理委員を依頼され取り扱うこととなった。⁽¹⁹⁾ このように同志社の財務態勢が整っていくなかで、寄附金の把握と管理は、実質的に

湯浅治郎が責任を担っていったものと考えられる。

次に、新聞雑誌社を経由しない寄附の方法について確認しておく。「明治専門学校」設立と称した時期以来、義捐金は郵便為替や銀行為替で送付することになっていて、東京の第一国立銀行以下、全国各地の銀行が取扱銀行として定められていた。当初、1884年5月に定められた明治専門学校の「義捐金申込書」⁽²⁰⁾が用いられ、厳密な変更時期は不明であるが、「大学」設立運動が始まると、代わって「同志社大学発起人新島襄殿」宛の「申込書」と題される小型用紙が使われた。⁽²¹⁾「東区本町一丁目十七番地大阪國文社印行」の印刷であるが、記入済の用紙には新潟や大阪などの寄附者居所が記され、広く各地で用いられたことが想像される。「府県」「町村」「番地」「月日」の文字がすでに印字され、必要事項を書き入れればよい様式であったが、「即納金」「予約金」を書き込む欄が設けられていた。つまり寄附に際しては、即納と予約とに分けての「申込」が可能であった。平安教会では、「引受委員」がこの用紙を使って会員による寄附の「登録」をしたとあるが、これも「申込」にあたる行為を指すのだろう。そして要するにこの方式が、後の未納問題を引き起こしていくことにもなったのである。

2 寄附額総計

情報が錯綜する記録類を前に、いかに寄附の実態を把握したものか途方に暮れてしまう今日の我々であるが、それは当時の同志社とて同じことであったといえよう。新島の死の前後から、寄附状況を正確に理解しようとの試みが積み重ねられたことが種々の簿冊からわかり、その苦労がしのばれる。寄附の申し出はあったものの未納というケースも多く、取り立てという現実的な課題のためにも、数字の確定が望まれていたといえる。

募金の報告が最初に公表されたのは、「第一回募金」が終了した1889年5月のことである。先述のように、1888年11月から翌年4月に至る募金の成果とし

表2 新聞雑誌社を窓口とした義捐金額

新聞社	1897年 総計（うち未納）	1889年5月 （第1回報告）
大阪毎日新聞社	50.800	50.800
神戸又新日報社	733.438 (250.288)	612.980
大阪朝日新聞社	704.125	563.325
中外電報・日出新聞社	446.780	391.700
愛媛新報社	39.100	—
海南新聞社	57.775 (13.550)	—
民友社	2913.646	2708.856
警醒社	877.052 (3.900)	581.422
毎日新聞社	124.680	124.680
報知新聞社	28.250	28.250
朝野新聞社	29.600	29.600
東京公論社	0.100	0.100
改進黨新聞社	4.300	4.300
經濟雜誌社	28.500	28.500
女學雜誌社	50.000	50.000
土陽新聞社	40.200	—
上記計	6128.346 (279.038)	5144.513
福岡日日新聞		171.800 (55.000)
北海道毎日新聞	284.600	

『明治三十年名簿』所収データ、「第一回報告」データによる。小数点以下の単位は銭・厘。（ ）内は未納金高。記録がない場合は—を記した。福岡日日新聞社は6月14日同紙面上のデータによる。

て「同志社大学義捐金第一回報告」が新島名で公にされた⁽²²⁾。表2中「第一回報告」とある欄が新聞社単位で記載された数字であり、これに「同志社」として直接集めた5,510円95銭7厘を加えた総計10,655円47銭との結果が、「同志社大学発起人新島襄」の名により示された。

続いて1889年5月末、関西の新聞にこの「第一回募金」明細を含めた募金高が報道された（『神戸又新』5.26、『大阪毎日』5.27、『大阪朝日』5.28）。ここでの募金高は、総計150,913円99銭9厘と大幅に跳ね上がっている。それは、

ハリスの寄附67,000 \$ を日本通貨に換算して加えた96,440円、そして「明治二十一年十一月」以前の募金額として43,818円52銭9厘を含めての数字が提示されたからである。外国からの寄附が合算されたのはこの時のみであるが、これ以降、「第一回募金」開始以前の「明治専門学校」創立と名乗った時代の募金については、「大学」設立募金の一環として合算でとり扱われていくことになる。

先にも述べたように、1889年11月末日の「第二回募金」締切に際しては、「第一回」終了時のような全体的報告が新聞紙上に掲載されることはなかった。なぜ第二回の報告は行われなかったのであろうか。新聞雑誌の窓口化は終わっても募金自体は終了しない、第一回に比して第二回の実績を挙げた新聞雑誌社が少ない（イメージダウンを防ぐ）、といった運動戦略上の問題、あるいは既納・未納の問題を含む寄附金の計算が実は難しい、未納分についての払い込みが引き続き行われている、という経理上の問題が合わさってのことではなかったろうか。

とはいえ、この年末にあたる1889年12月31日には「同志社大学募金会計報告」がまとめられた⁽²³⁾。作成者は前述の書記広瀬源一郎で、大磯の新島に宛てて金森へも送ってほしいと述べている。同志社内部の史料であり公表されたわけではないが、「予約」と「即納」とを区別して算出した初めての報告ということになるだろう。これによると、義捐金は59,877円68銭9厘、うち現金収入高が39,178円70銭2厘、未納金高が20,377円98銭7厘であった。この時点での納入率は65.4%ということになる。

次に募金の決算実施が確認されるのは、1891年4月1日のことである。「大学創立事務所」が、「自明治十七年三月至明治二十四年三月 大学資金収支決算報告書」と題する書類をまとめた⁽²⁴⁾。これは先述した湯浅治郎の主務就任と軌を一にする。京都府下の有力者が京都商工会議所に集まって明治専門学校設立有志者となり、議決・仮規則を定め、不可動の目標額を70,000円と掲げた1884

年4月を始期と明示した。そして、1891年3月までの義捐金61,468円56銭5厘、うち18,727円31円3厘が予約未納金、45,334円20銭2厘が現金収入高と計上した。納入率は1年3ヶ月で73.8%に伸びた。

明治二十四年度、すなわちこの1891年度から『同志社報告』が刊行され、末尾に資本に関わる数字が公表されるようになった。『同志社明治廿四年度報告』(1892年6月)によれば、同志社大学寄附予約高は61,222円66銭、未納金が17,162円86銭3厘、現収納高が44,059円79銭7厘とある。1891年3月の数字との食い違いがあり、寄附金の正確な把握がまだできていない状況がうかがわれる。また「大学」への寄附を「政法学校資金」の部に組み入れて処理し、以後同様に扱われていくこととなった。また『同志社明治廿五年度報告』からは、末尾の目録において、その年度に受け付けた個人の寄附明細(実際は多くが未納金の支払い)が公にされていく。

そして最初に述べたように、明治30年すなわち1897年の1月に大学設立義捐金のとりまとめが行われ、『明治三十年名簿』『明治三十年参考書』の二簿冊が調製された。詳しい経緯にまで検討が及ばないが、アメリカン・ボードとの関係やキリスト教主義教育の位置付けをめぐる社員間の緊張が高まる中、経営や資産をめぐる議論の前提として、義捐金総体の正確な把握が急務であったことは、想像に難くない。1889年や1891年の報告と異なり、1700件以上に上る個人レベルでの寄附額(納入状況)の明細、そして新聞雑誌社の寄附額の明細も付した総決算的な記録である。

1898年3月、社長横井時雄は、「湯浅治郎氏は本年度資金管理委員報告の終わるを待って委員を辞せられんとす同氏は従来委員中にあつても当局の主任として刻苦経営せられ新島先生没後の財政を受け継ぎて其今日あるを得せしめしは偏に同氏の功に由ると云ふも過言にあらざるべし」と述べている⁽²⁵⁾。義捐金に関わる二冊の簿冊は、湯浅が積み重ねてきた1891年以来の努力の結晶といったところであろう。

『明治三十年名簿』の冒頭に記された「凡例」によると、個人の寄附状況については、「義捐元帳」や「明治二十四年度以後同志社報告書」と符合しつつ作成したとされている。「義捐元帳」とは、寄附者名が列記された1884年以來の簿冊類（現存）を指すのだろう。

『明治三十年名簿』の最後に手書きで示されたのが、総計として申込高62,466円21銭7厘、収入高48,569円84銭9厘、未納高13,897円36銭8厘との数字である。これが1884年以來の最終的な決算であり、77.8%の納入率という勘定になる。また、当初不可動の目標額とされた70,000円に対し、外国からの寄附を考慮せずに計算すれば、69.4%の目標達成率となる。

3 寄附額内訳

『明治三十年名簿』は簿冊タイトルに「府県別」と付記するが、実際には全国をブロック割りし、寄附金額の整理を図ったものである。総計1,700名を超える寄附者について、寄附年月日は不問とし、一人一人の全「寄附金額」を「申込金額」「払込金額」「残金額」に分けて記している点を特徴とする。

表3に、地域ブロック単位での申込金額、払込金額を記した。払込金額欄に

表3 地域別義捐金（1897年）

地域	申込金額	払込金額（対申込金額比率）	対総払込額比率
①京都府下	6797.351	4449.341（65.5%）	9.2%
②府市内	556.070	5.000（0.9%）	0%
③東京府下	32422.265	27072.265（83.5%）	55.7%
④大阪府下	12649.890	7726.590（61.1%）	15.9%
⑤兵庫県下	666.383	501.083（75.2%）	1%
⑥中国筋	192.532	192.032（99.7%）	0.4%
⑦九州地方	459.090	321.940（70.1%）	0.7%
⑧四国地方	137.000	136.500（99.6%）	0.3%
⑨関東地方	1395.950	1344.050（96.3%）	2.8%
⑩関西地方	712.910	630.810（88.5%）	1.3%
（新聞社）	6128.346	5850.308（95.5%）	12.0%

『明治三十年名簿』による区分。単位円。小数点以下の単位は、銭・厘。

は、申込金額に対する割合を算出して（ ）内に併記した。またその後、募金の総払込金額（実収入）48,569円84銭9厘に対するブロックの払込金額の割合を算出して記した（いずれも％については、小数点二桁以下四捨五入）。なお「北海道」ブロックについては、個人名は挙がらず、『北海道毎日新聞』の集めた金額のみが記されているので、表2に譲る。

また『明治三十年名簿』では、地域ごとのとりまとめの後に、「諸新聞社」経由の募金額がまとめられている。最終的な申込高6,128円34銭6厘（収入高5,850円30銭8厘、未納高279円3銭8厘）の内訳を表2「1897年」の欄に示した。なお、福岡日日新聞社はここに含まれず、九州地方の欄に個人単位に分解して記載されているので、同社が独自に1889年6月にまとめた記録を別立てて記す。また北海道毎日新聞社分についても、「諸新聞社」の部に入れずに、後述する地域単位のブロックの末尾に「北海道」として示されているので、別途記載した。また新聞社（福岡・北海道の二紙を除く）の総計については、比較参照用として表3の方に併記した。

ブロック割に際し、最初に「京都府下」のカテゴリーが設けられている点は、大学設立に際し、地元京都が募金の主たる地盤として認識されていたことを示しているだろう。また、関東地方とは東京を、関西地方とは京都・大阪・兵庫を除いた府県ということになり、東京・大阪・兵庫も有力な支持基盤とみなされていたことがわかる。

次に、本簿冊が設定したブロックごとに、申込金額が100円以上の個人に限ってピックアップし、申込金額ならびに実際の払込金額（（ ）内）を記した。すべての人物の払込過程を示すことはできないが、試みに、申し込みと同時ではなく、1890年10月以降の（部分）支払いが確認される寄附については、*を付した。⁽²⁶⁾

① 京都府下

濱岡光哲1,000（*500） 田中源太郎350（300） 北垣国道300（300）

内貴甚三郎300 (0)	中村栄助300 (*300)	森本後凋100 (0)
西村七三郎100 (0)	大澤清八100 (*100)	大澤善助100 (*100)
菱木信興100 (100)	伊東熊夫100 (0)	中井三郎兵衛100 (70)
杉浦利貞100 (*100)	竹村藤兵衛100 (0)	市田文次郎100 (100)
児玉精齋100 (30)	半井澄100 (100)	

② 府庁内 (該当者なし)

③ 東京府下

伊藤博文100 (100)	陸奥宗光300 (300)	後藤象二郎100 (100)
三好退蔵300 (*300)	大隈重信1,000 (1,000)	井上馨1,000 (1,000)
青木周蔵500 (500)	渋沢栄一6,000 (6,000)	
原六郎6,000 (*2,000)	岩崎弥之助5,000 (5,000)	
岩崎久弥3,000 (3,000)	平沼八太郎2,500 (2,500)	
大倉喜八郎2,000 (2,000)	益田孝2,000 (*1,000)	
田中平八2,000 (2,000)	高島鞆之助200 (*100カ)	
西村捨三200 (50)	上野栄三郎100 (100)	

④ 大阪府下

土倉庄三郎5,000 (1,500)	藤田鹿太郎500 (*500)	
久原庄三郎500 (*500)	織田純一郎100 (100)	
同夫人100 (100)	住友吉左衛門3,000 (*3,000)	
磯野小右衛門500 (0)	川上左七郎300 (300)	荒木博臣100 (0)

⑤ 兵庫県下

北儀右衛門100 (50)	市田左右太100 (*100)	川本泰年100 (*100)
---------------	-----------------	----------------

⑥ 中国筋 備前、備中、安芸、周防、長門 (該当者なし)

⑦ 九州地方

上田周策100 (25)

⑧ 四国地方

大野侗吉100 (100)

⑨ 関東地方

岡本彦八郎100 (100) 松本勘十郎250 (200) 半田宇平治700 (700)

新海栄太郎100 (100)

⑩ 関西地方

中井弘200 (200) 高田義甫100 (20)

4 多額申込者の納付状況

まず京都府下については、高久の論考にて言及される「京都府下（予約申入）大学資金寄附未納者姓名録」⁽²⁷⁾が1890年10月より1891年10月の間に作成されており、未納分のある者について、彼らの全申込額4,761円89銭中、622円94銭しか払い込まれておらず、未納額が4,133円95銭あったことがわかる。京都府分の1897年1月最終未納金は2,899円8銭（表3の①②合算により算出）であるから、それまでに1,200円以上の取り立てが行われたということになる。

また府庁内の人物については、実際の寄附がほとんどなされていないという高久の指摘が、上記②により、1897年に至るまで当てはまることがわかる。①に別途名の挙がる森本書記官の寄附が結局なされていないように、京都府庁内からの小口申し込みも、ほとんどは最後まで回収できなかった。府下からの拠金の割合は全体の1割弱であり（9.2%）、京都という「地域の大学」と考えるには低調であったと評価したい。

続いて東京府下の有力者についてみていこう。結局、東京府下の中央官財界関係者からの拠金が、全体の半額以上（55.7%）を占めることになった。

1888年の4月22日には井上馨邸で、7月19日には大隈重信邸で、明治専門学校設立のための相談会が開かれる⁽²⁸⁾が、参加者で寄附の事実が見当たらないのは、通信次官の野村靖と神奈川県知事の沖守固程度で、それ以外の有力者はほぼ上記リストに含まれ、自らの懐から出資している。金銭的なまとめ役になってい

たのは、⁽²⁹⁾ 渋沢栄一だと思われるが、募金運動全体を通じて最も多額の寄附を申し出たのは、留学経験もある実業家の原六郎であり、新島も彼の気を損ねないよう気を遣っていたことが「日誌」からうかがわれる。⁽³⁰⁾ 6,000円の申し込みをしていた原は、1893年度に1,000円、1894年度に1,000円を支払うが、⁽³¹⁾ 『明治三十年名簿』作成後になって、正金銀行株券及整理公債で残り4,000円をようやく完納し、「殊に深く感謝」⁽³²⁾ されている。

なお1889年元旦、新島がその日誌において「同志社之賛成家」と表現した人物は、井上・大隈・青木・榎本・勝・後藤・渋沢・益田・原・平沼・田中・大倉・岩崎・土倉であったが、⁽³³⁾ このうち榎本・勝については寄附を確認できない。中江兆民のごとく、金銭面とは異なる協力者という位置づけであろう。

また、同志社の発展に理解を示していた森有礼文相は、⁽³⁴⁾ 寄附の事実は認められないまま、募金運動の真っ最中に命を落としたことになる。帝国大学総長渡辺洪基については、新島との直接のやりとりが残っている。⁽³⁵⁾ ①国家のために私立大学設置成就を望むが、他に企図する事業が多く、自分は寄附や援助の周旋はできない、②他の大学関係者も同様だと思われる、③他への寄附周旋をせよとのことだが、あまりうるさく行動しない方がよいと思う、とやんわりと断っている。渡辺の真意のほどははかりかねるが、いずれにせよ協力的な姿勢とはいえ、他の帝大関係者の寄附もたしかに見当たらない。ちなみに知識人層では、西周による10円の寄附が認められるが、その程度である。

これらの現実の一方で、集会などには顔を出さず、これまで指摘されてこなかった伊藤博文の寄附を見逃すわけにいかない。伊藤については、1887年に妻梅子が京都看病婦学校に関して新島に助言を行った過去があるが、⁽³⁶⁾ その好意的姿勢は、「大学」設立問題にも維持されていたわけである。

続いて大阪では、京都をしのぎ、全体の約6分の1（15.9%）の寄附が集まった。同志社との縁が深い土倉庄三郎に加え（奈良県設置以前を考慮し、大和は大阪にカテゴライズされている）、藤田組の久原や藤田、住友吉左衛門によ

る寄附が、東京の財界人の金額に比肩する。また、留学を経験し翻訳家として活躍した織田純一郎は、このとき大阪朝日新聞主筆であり、夫妻で200円を寄附していることが目に留まる。なお、別の簿冊に挙がる児島惟謙の100円が『明治三十年名簿』に見当たらない理由は不明である⁽³⁷⁾。

そのほか近隣県をみると、兵庫県では豪商の北儀右衛門、写真家の市田左右太がおり、クリスチャンとしては上記の三田藩医川本泰年のほか、鈴木清が『神戸又新日報』に100円の寄附を申し込んでいる⁽³⁸⁾。ただし市田と川本（実際には息子の恂蔵）の寄附は、1896年になってからのことで、もはや「大学」ではなく「本社」への寄附とされた⁽³⁹⁾。滋賀県知事の中井弘による200円の拠出は、よく知られる京都府北垣国道と並び、知事クラスの協力姿勢として特記されるだろう。

最後に関東地方について。『国民之友』誌上でも顕著なように、新島の郷里・上州は大学設立運動の一大支持基盤であり、小口の寄附のみならず地域有力者層（時にクリスチャン）の大口寄附が目立つ。ここに示した以外にも、『国民之友』には100円以上の寄附として、安中の湯浅治郎100円、原市の半田平次郎300円、倉賀野の松本勘十郎250円が挙がる⁽⁴⁰⁾。うち松本に関しては、同志社への複数回の申し込みに『国民之友』を介した申し込みまで加わって、払込状況がとりわけ錯綜した。『明治三十年参考書』には、本件をめぐる、1894年1月22日に湯浅治郎とやりとりされた書簡が残される。寄附の実態を示す一例として、この書簡から浮かび上がる経緯を紹介しよう。

当時の社長小崎弘道から、第一銀行を通じた払い込みの事実が確認できないという連絡が入り、これに対して松本は、「金五拾円 明治十八年十二月 払込切符ハ新島君御所持ニアル」「金五拾円 同十九年一月二十八日 払込切符相副」「金五拾円 明治廿年中 金森氏へ正金渡し」「金百円 明治廿一年国民社払込」と、4回の支払い（計250円）を行ったとの言い分を湯浅に書き送っている。それとともに、1889年1月の支払いに関しては、その証拠となる「切

符」を同封した。ところが最初の1885年12月分について、証拠物件たる切符の所在をめぐり、同志社との間に認識の食い違いがあった。証拠物件が出ない以上、第一銀行に問い合わせても埒が明かなかった。結局同志社側は、支払いの事実を認めず、さりとて松本から50円の追加支払いがあったわけではなく、最終的には計200円の寄附が記録されるという顛末に導かれたようだ。

製糸場の光塩社を経営し、キリスト教に親しむ松本であったが、その寄附状況からは、以下の事実を読み取ることができる。①申し込みの重複。『国民之友』にはすべてをまとめた予定額としての「250円」を伝えたのであって、同志社に申し込んだ額「以外」に250円の納付を約束したのではない。②五月雨式の支払い。申込額は一気に納付されたわけではない。③支払いへの負担感。この書簡では、「昨年雪害夏ハ旱魃水利欠乏」による「地方疲弊」を訴えて理解を求めている。

これらは松本にのみ特徴的な傾向だったのではなく、例えば五月雨式の支払いは、別の個人寄附者にも多く認められ、かつ一部の新聞にも共通するところであった。神戸又新日報社は強い協力姿勢を示したが、表2にみるように未納金も多い。1890年6月24日に「村上定氏ノ尽力」により73円15銭の回収を行ったことが記されるなど、寄附の申し込みは取り次いだものの、その回収に後日⁽⁴¹⁾も苦勞しなくてはならなかった実態がうかがわれる。

おわりに

最後に、これまでに積み重ねてきた細かい分析をふまえ、同志社の大学設立募金運動の特徴を次のようにまとめておきたい。

(1)「大学」設立募金運動とは、狭義には1888年11月に新聞雑誌上での広告をもって開始された運動を指し、広義には1884年4月より「明治専門学校」設立の名の下で行われた運動を指す。

(2) 義捐行為は主に、①中央官財界人②全国のキリスト教徒③地域の有力者、という三つの主体に認められる。これらの階層・集団が、「大学」設立構想の核となる支持者であった。

(3) 会計はある意味杜撰であった。それは義捐金の「支払」を受け付けるというより、支払いの「申込」を受け付ける方式が採られ、即納金と予約金との二重構造になっていたことに起因した。募金に熱心であればあるほど、たとえ口約束であっても、前のめりに申し込みを取り付けていくことをよとした運動主体の姿が背後にみえる。例えば、最終的に5,000円の申し込みがあったと同志社が判断した岩崎弥之助についても、当時の新島は8,000円の寄附を約束していると認識⁽⁴²⁾していた。

(4) その結果、帳簿の整理と取り立てが継続的に行われ、最終的には1897年1月にとりまとめられた。であるから、これをもって「大学」設立募金運動の終期とみることも可能である。申し込みに対する納入率は8割弱、当初目標額約70,000円に対しては約7割の達成率となった（ただしこの後、原六郎から4,000円の回収が実現した）。

(5) 新聞雑誌社に宣伝と仲介役を依頼し集金する方法は、同志社独特の運動形態であった。同志社に数ヶ月遅れて始まった慶応義塾の大学校設立募金の成果も諸紙に報道されたが、これは「慶応義塾学資募集掛」が義捐者の姓名と金額の「有様を広告」するために行ったものであり、新聞雑誌社が窓口となつての募金ではない⁽⁴³⁾。帝国大学の発足も背景に、「仏教大学校」構想など⁽⁴⁴⁾、「大学」なる新奇な教育組織の設立への関心は高まっていたが、同志社のような新聞雑誌社を通じた拠金は見られない。

(6) 新聞雑誌社経由の金銭的成果は、全体の1割強を占める。1888年11月から1889年4月の「第一回募金」は、東京・関西の新聞雑誌社を中心に、九州・四国・北海道の新聞にも及び、20社以上の支持を得た。一貫して運動を主導した徳富蘇峰『国民之友』と『基督教新聞』の果たした役割が大きく、広く

キリスト教界から寄附を集めることに成功した。関西の諸新聞がこれに次ぐ成果を挙げ、地域の有力者とキリスト教界からの寄附窓口として機能した。続く5月から11月の「第二回募金」期間には、全体の成果は5分の1程度に縮小し、キリスト教色とローカル性がより強まった。

今回は、100円以上の寄附申込者に限っての考察にとどまったが、これを50円、30円と引き下げて検討することも有効である。「日誌」からは、募金的手段として各地の県会議長・県会議員クラスへの働きかけが自覚的に行われたことが確認されるが、彼らの寄附実態を明らかにすることにつながるであろう。京都の市中に限ってみても、どの階層・職種に寄附が多いか、北垣府政に対する政治的スタンスと寄附との関係など、より地域に即した分析も可能となる。一方で、同志社内部の教員や学生の寄附実態の解明を必要とする向きもあろう。なお、集まった寄附金の位置付け・使われ方についても、同志社の会計処理の問題として検討が必要である。⁽⁴⁵⁾

他にも課題は種々想起されるが、筆者の同志社大学設立運動研究は、ひとまずここで終えることとする。

注

- (1) 高久嶺之介「新島襄と京都府政の人々—大学設立募金運動をささえた人脈—」(『同志社談叢』36号、2016年)。
- (2) 『国民之友』『大阪朝日新聞』『土陽新聞』『海南新聞』『北海道毎日新聞』の5新聞分が、『明治三十年参考書』に綴じられている。会計報告として寄附者人名と寄附額のリストを同志社に送ったものと思われる。
- (3) 「『第一回同志社大学義捐金』新聞雑誌別総覧」、「『国民之友』掲載同志社大学設立義捐者一覧」。それぞれ以下注(4)の②・③に収録。
- (4) 拙稿①「同志社「大学設立義捐金募集運動」再考—取扱窓口となった新聞雑誌についてのスケッチ—」(『新島研究』第106号、2015年)、②「同志社第一回「大学設立義捐金募集運動」—京阪神諸新聞社の報道にみる—」(『キリスト教社会問題研究』第64号、2015年)、③「同志社大学設立運動とキリスト教界」(『キリスト教

社会問題研究』第65号、2016年)。

- (5) 「社告」とは、広告料を取っての掲載ではなく、会社としての広告であることの表明であるが、5月1日の広告では、『日出新聞』と『神戸又新日報』が「社告」としている。ただ「社告」と銘打っていないでも、文責にその新聞社名がある場合は、「社告」と同じで広告料は発生しないとみなしうる。
- (6) 『大阪公論』『京都日報』は、紙面が残っておらず確認できない。後述の最終会計において両紙名は記されないで、紙上で広告があったとしても、両紙を窓口とした義捐金はなかったものと類推する。『東雲新聞』は、拙稿「京阪神」で指摘したように、論陣を張った点では大いに運動に貢献したが、実際の募金窓口となった形跡がなく、「第二回広告」も紙上には掲載されなかった(中江兆民個人の拠金は今回も認められない)。
- (7) 「同志社大学第二回義捐金募集広告稿」(『同志社百年史』資料編一、1979年、230頁所収)。同志社社史資料センター「新島遺品庫」HPでは目録番号0058で画像閲覧が可能。
- (8) [同志社大学設立募金日誌](『新島襄全集』5日誌・紀行編、同朋舎出版、1984年、以下「日誌」と略記)、460頁。この「日誌」は、前掲『同志社百年史』資料編一にも収録される(193~220頁)。
- (9) 注(8)「日誌」、467頁。
- (10) 山室信一編集『マイクロフィルム版 明治期学術・言論雑誌集成 別冊』(ナダ書房、1987年)、50頁。折々に交代する編輯人と同志社への態度との関係については不明である。
- (11) 『北海道毎日新聞』の動向については、小枝弘和「北海道における同志社大学設立運動——『北海道毎日新聞』を手がかりに——」(『新島研究』第99号、2008年)を参照。なお同論文には、『北海道毎日新聞』に寄せられた1889年5月までの個別寄附リストが掲載されているため、拙稿「京阪神」所収の「『第一回同志社大学義捐金』新聞雑誌別総覧」ではこれを省いた。6月以降については一部の寄附者しか反映されていないため、本稿末尾の「『第二回同志社大学義捐金』新聞雑誌別総覧」には、『北海道毎日新聞』に寄せられた「第二回募金」期の寄附もリストアップしてある。
- (12) 以下、「創立事務所 書記」が作成した『同志社大学義捐金姓名帳 第二回募集之分』と題する簿冊中の手書き日録による。
- (13) 東京・関西以外の地方紙の払込経緯に関しては、ここで注記しておく。『同志社大学義捐金姓名帳 第二回募集之分』によると、土陽新聞社は、「第一回募金」の成果を5月に納入した。海南新聞社は、「第一回募金」を12月13日に一部送り(31円57銭5厘)、1891年9月16日になって再び一部を送ったが(12円65銭)、紙上に掲載されたすべてを納めきらなかった。福岡日日新聞社は納入方法が独特で、

- ①本社から同志社に送金した分と②「募集金取次人」広津友吉を通して同志社に直に収めた分とがある。先述の6月14日の紙上報告によると、義捐金総高171円80銭、内訳は①が95円15銭、②が21円50銭、年賦金未収入高が55円、為替料郵便料が15銭とある。北海道毎日新聞社は、『明治三十年参考書』に、1889年7月付の寄附者リスト（甲）と1889年10月付の寄附者リスト（乙）とが存在し、前者に前年より5月まで、後者にそれ以降9月までの寄附者が並ぶ。1889年10月29日に合算して284円60銭と同志社に報告している。
- (14) 〔明治専門校設立有志者の議決並仮則〕（前掲『同志社百年史』資料編一、347～348頁）。
- (15) 前掲『同志社大学義捐金姓名帳 第二回募集之分』の新島死後の箇所、廣瀬の印のある付箋で記されている。
- (16) 〔同志社法律専門校創立方見込〕（前掲『同志社百年史』資料編一、348～353頁）など。
- (17) 前掲『同志社大学義捐金姓名帳 第二回募集之分』に、「明治二十三年十月一日ヨリ同志社会計局之取扱ヲ受ク后チヨリ記載ス」との注記を伴う「大学義捐金記入帖」が、頁をあらためて綴じられている。それ以降、記載に伴う個人印が「廣瀬」から「島田」に変更される。「廣瀬」は、「同志社大学募金会計報告」（前掲『同志社百年史』資料編一、224～228頁）により、廣瀬源三郎であることが確認できる。
- (18) 『同志社明治廿四年度報告』（前掲『同志社百年史』資料編一にも所収、782頁）。
- (19) 『同志社明治廿五年度報告』（同上、786頁）。
- (20) 『同志社百年史』資料編一、358頁。こちらには、即納と予約の区別はない。
- (21) 前掲『同志社大学義捐金姓名帳 第二回募集之分』に数枚挟み込まれている。平安教会に関わる記載も同簿冊にあり。
- (22) 窓口となった各紙に掲載。例えば『神戸又新日報』・『日出新聞』など（1889.5.28）。前掲『同志社百年史』資料編一にも収録（220頁）。
- (23) 前掲『同志社百年史』資料編一、224～228頁参照。
- (24) 前掲『明治三十年参考書』に所収。
- (25) 『同志社明治三十年度報告』（前掲『同志社百年史』資料編一にも所収、809頁）。
- (26) 注(17)の「大学義捐金記入帖」（末尾は1894年1月）、『同志社報告』明治24～30年度の寄付明細で確認した。ちなみに高島鞆之助は、『同志社明治廿九年度報告』では100円寄附した記録があるが、『明治三十年名簿』ではまだ寄附が記録されていないので、100カとした。
- (27) 募金に関わる雑多な史料を集めて一冊とした簿冊『同志社大学義捐金者名簿』（請求番号 A7-3-M2）の中に、こより綴りの書類として綴じ込まれている一史料である。数字は朱字書き込みを合算した。この未納者リストは、本文朱字書き

込みと注(17)「大学義捐金記入帖」との比較から、1890年1月以降に作られ1891年10月以前(杉浦利貞の支払い状況)に作成されていると考えられる。なお当該簿冊は、募金活動に付随する種々の関連書類(趣意文や寄附の中間報告的な書類)をとりあえず綴じ込んだといった性格のもので、簿冊タイトルも、また簿冊背表紙の「明治二十一年(一八八八)」との年代表記も、必ずしも中身に即したのではない。本来、前掲の『明治三十年参考書』に入れられてもよかったのではないかと思える史料群である。

- (28) 注(1)高久論文参照。
- (29) 注(8)「日誌」、449～450頁(1889年3月)。
- (30) 同上「日誌」、439～440、449～450頁(1889年3月)。
- (31) 注(17)「大学義捐金記入帖」の記載、『同志社明治廿九年度報告』『同志社明治三十年度報告』末尾の寄附明細による。
- (32) 『同志社明治三十年度報告』(前掲『同志社百年史』資料編一にも所収、809頁)。このとき、岩崎弥之助も経常費不足補充のため1,000円の臨時寄附を追加している。
- (33) 注(8)「日誌」、427頁。
- (34) 高等中学校化のすすめなど、森が同志社に示した一種の好意については、拙稿「『官立学校』概念の輪郭」(『近代日本高等教育体制の黎明 交錯する地域と国とキリスト教界』思文閣出版、2012年の第九章)を参照。
- (35) 1888年12月8日付渡辺洪基発新島襄宛書簡(『新島襄全集』9来簡編<下>、思文閣出版、1992年)。なお、翌年7月18日の伴直之助発新島襄宛書簡(同上所収)によると、伴が渡辺を訪ねたところ、設立するなら「小体ノ大学校」にすることを勧めている。
- (36) 伊藤梅子と京都看病婦学校の関わりについては、拙稿「京都看病婦学校開設運動の再検討——地域の支持形態に着目して」(『キリスト教社会問題研究』第61号、2013年)を参照。
- (37) 注(17)「大学義捐金記入帖」において、「明治廿四年」と付記し、三好退蔵とともに書き込まれている。『同志社明治廿五年度報告』寄付目録にも、東京在住者として記載がある。
- (38) 拙稿「京阪神」所収「『第一回同志社大学義捐金』新聞雑誌別総覧」参照。
- (39) 『同志社明治廿九年度報告』(前掲『同志社百年史』資料編一にも明細以外は所収、802頁)。
- (40) 拙稿「キリスト教界」所収「『国民之友』掲載同志社大学設立義捐者一覧」参照。
- (41) 前掲『同志社大学義捐金姓名帳 第二回募集之分』に記載。
- (42) 注(8)「日誌」、431頁(1889年2月19日)。
- (43) 一例として、『郵便報知新聞』では1889年6月から10月にかけて20回以上も掲載

され、義捐者名が列記される。『朝野新聞』『毎日新聞』も同様である。

- (44) 例えば同志社大学に対峙して各宗派が主唱して一つの佛教大学を設立しようという噂などが流れた（『日出新聞』1889年5月15日）。
- (45) 例えば『同志社明治廿四年度報告』では、寄附者の承諾を得てとしながらも、一部を「普通学校資金」へと繰り替えている。

(第19期第1研究会による成果)

「第二回同志社大学義捐金」新聞雑誌別総覧 凡例

- ・本表は、「第二回募金」（1889.5～1889.11）の取扱窓口となった新聞雑誌（現存分）上に掲載された寄附者および寄附額の総覧表である。ただし、抜群の実績を挙げた『国民之友』掲載分については、すでに拙稿「同志社大学設立運動とキリスト教界」（『キリスト教社会問題研究』第65号、2016年）の末尾に掲げた「『国民之友』掲載同志社大学設立義捐者一覧」において、「第一回募金」「第二回募金」を一括して約1500件をリストアップ済みであり、そちらに譲る。
- ・記載したのは、①『毎日新聞』②『基督教新聞』③『女学雑誌』④『大阪朝日新聞』⑤『大阪毎日新聞』⑥『中外電報』⑦『日出新聞』⑧『神戸又新日報』⑨『福岡日日新聞』⑩『北海道毎日新聞』の計10紙に掲載された寄附者と寄附額である。募金窓口になることを広告で表明した『郵便報知新聞』『朝野新聞』『東京朝日新聞』『東京経済雑誌』『東京輿論新誌』『東雲新聞』については、検索を行ったが記載が見当たらなかったもので、項目化していない。『東京公論』『東京新報』『改進黨』『江戸新聞』『京都日報』については、資料の残存状態が悪く検索が不可能であった。東京・関西以外の地域の新聞については、個別寄附記録が認められた『福岡日日新聞』『北海道毎日新聞』の情報のみを記した。
- ・「掲載日」は寄附情報を記した紙面の日付であって、寄附日とは限らない。「第一回募金」にその日の寄附を合算した新聞社もある。その可能性がある場合には、日付欄に*を付した。
- ・「寄附額」欄の単位は円で、小数点以下銭、厘である。
- ・紙面上の表記を基本的にそのまま転記した。
- ・旧字体は原則的に新字体に直したが、氏名・地名に関しては、旧字体をそのまま記した場合もある。
- ・史料の状態により判読できなかった箇所は■で示した。

「第二回同志社大学義捐金」新聞雑誌別総覧

①毎日新聞			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.5.24	0.1	横浜	大星平子
②基督教新聞			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.5.22	10		東京番町婦人会
	2.36		青森県弘前教会有志者
	2		徳山 基督教信徒
1889.6.5	7.8		広島教会
	20	石見国鹿足郡色麻村	堀昌造
	2.4	備中高梁中間町	赤木蘇平
	0.5	横須賀基督教会	三好市松
	0.5	羽前米澤市大字元瀧町	村田昭
	1	岡山県哲多郡井倉村	宮脇卯平
	0.1	同上房郡松山村	中村信太郎
	0.1	同	栗本政吉
	0.2	同有漢村	綱島豊佐久
	0.3	同	笹田金治郎
	0.1	同	同 きし
	0.1	同	同 ちか
	0.3	同	神崎秀甫
	0.1	同	同 つる
	0.1	同	同 はつ
	0.1	新潟農学校有志者	山本順太郎
	0.1		乾喜三郎
	0.1		石黒長平
	0.1		田村友四郎
	0.1		松原辰司
	0.1		水澤成郎
	0.1		渡邊俊吉
	0.1		日野田懇八
	0.1		岡村綱蔵
	0.1		岡名正明
	0.1		磯部龍次
	0.1		猪又梅蔵
	0.1		安永丈夫
	0.1		金井保
	0.1		吉川三男司
	0.1		小林虎三郎
	0.1		高野力平
	0.1		高野禎三郎

	0.1		村井鐵作
	0.1		櫻井興三郎
	0.1		和気一郎
	0.1		佐野鐵之助
	0.1		大原三郎
	0.1		宇都宮十郎
	0.15		富取東朔
	2	新潟	岸宇吉
	2		中山周貞
	2		竹澤文次郎
	2		青山一蔵
	2		横山清七
	2		谷利一郎
	1		藤田房五郎
	1		佐々木善次郎
	1		立花安治郎
	1		濱島高庸
	1		足立隆則
	0.6		細目邦太郎
	0.2		矢島哲二
	0.3		土田虎太
	0.1		奥田大蔵
	2		小林傳作
	0.3		長谷川三男三郎
	0.3		野本捨次郎
	0.1		田中春梅
	0.1		小坂部勇吉
	0.1	農学校	樋口門平
	0.1		荒井敏作
	0.1		押木林渡
	0.1		田養榮五郎
	0.1		林正三
	0.1		本山運平
	0.1		保草信太郎
	0.1		富樫菊五郎
	0.1		高橋保
	0.1		山本比古次
	0.1		江口愷一郎
	0.1		天野謙太郎
	0.1		五十嵐仁太郎
	0.1		山本佐太郎
	0.1		山本熊次
	0.1		塚田三郎
	0.1		菊池龍三

	0.1		稲川武		(\$1)	笠松正之助	
	0.1		上田保太郎		(\$1)	有馬金次郎	
	0.1		平野樹四郎		(\$1)	三谷幸吉郎	
	0.1		樺山十次		(\$1)	柳澤佐吉	
	0.1		間納持雄		(\$1)	石川角次郎	
	0.1		新木友三郎		(\$0.5)	高橋國三郎	
	0.1		関三郎治		(\$0.5)	福富岩松	
	0.1		池田喜一郎		(\$0.5)	佐藤宗三郎	
	0.1		佐藤鐵次		(\$0.5)	曾我部信雄	
	0.1	商工学生会徒	多田茂吉		(\$0.5)	下高原禄龍	
	0.1		長谷川儀七		(\$0.5)	濱田清次郎	
	0.1		白濱喜三郎		(\$0.5)	鳥井豊次郎	
	0.1		本間常松		(\$0.5)	森岡虎彌	
	0.1		神山住七		(\$0.5)	高橋元吉	
	0.1		池田忠治郎		(\$0.5)	石川才次郎	
	0.1		佐田竹造		(\$0.5)	藤原卯吉	
	0.1		宇治多吉		(\$0.5)	岡友二郎	
	0.1		丸山要吉		(\$0.5)	小林彦次郎	
	0.1		横山長七		(\$0.5)	野崎錫	
	0.65		他拾三名		(\$0.5)	杉崎正豊	
	0.1		野口文吉		(\$0.5)	大河原初太郎	
	0.1		松谷宗治		(\$0.5)	山田作太郎	
	0.1		大関榮三郎		(\$0.5)	今井頼興	
	1		山崎倫		(\$0.5)	川上昌保	
	0.2		村山富次郎		(\$0.5)	村田良作	
	0.25		武田十一郎		(\$0.25)	鈴木金作	
	0.3		白石梅路		(\$0.25)	藤代市次郎	
1889.6.12	5.3	東京	日本橋教会		(\$0.25)	永田亀五郎	
	4.1	同	両国教会		(\$0.25)	柴代廣吉	
	1.2	熊本	美以美教会員中		(\$0.25)	生谷卯兵衛	
	1	東京麹町区三番町五十三番地	岩波美篤		(\$0.25)	鈴木勇三郎	
	0.5	数寄屋橋教会員	野澤重太郎		(\$0.25)	村尾直次郎	
	100(\$76)	米国桑港ミッション街千百六十三番館	日本人基督教青年会		(\$0.25)	山野吉次	
	(内訳(\$5))		佐藤周造		(\$0.25)	玉井統英	
	(\$3)		大岡陽太郎		(\$0.25)	佐久間民次郎	
	(\$3)		羽田與助		(\$0.25)	森田伊三郎	
	(\$2)		牧野讓		(\$39.75)	伝道費常備金	
	(\$1.5)		佐々木勉	1889.6.19	0.5	東京第一基督教会員	島田カ子
	(\$1)		春口伊之助		0.5	同	同 錫吉
	(\$1)		落合啓藏		0.1	同	無名氏
	(\$1)		水橋吉之助		0.3	同	中島シン
	(\$1)		石川定國		0.2	同	大西祝
					0.5	同	鶴田三郎
					0.2	同	三田村スイ
					0.2	同	矢野カツ

同志社大学設立支援の現実

	0.3	同	疋田ヨシ
	0.15	同	岩澤カ子
	0.2	同	浅野ハル
	5	同	ミセスフォルク
	1	同	神谷貞廣
	0.1	同	海老名リン
	0.2	八王子町福音教会	栗原孝太郎
	0.3	同	高野丈三
	\$7		米国オークランド日本教会
	(内訳)(\$1)		市村繁太郎
	(\$1)		光井於菟助
	(\$1)		無名氏
	(\$0.5)		内藤殖
	(\$0.5)		中村小二郎
	(\$0.5)		大川為親
	(\$0.5)		無名氏
	(\$0.5)		無名氏
	(\$0.5)		小林逸平
	(\$0.4)		福田録三郎
	(\$0.25)		間霜廉二
	(\$0.25)		住友六郎
	(\$0.25)		芥川平二郎
	(\$0.25)		無名氏
1889.7.10	0.5	横浜浸禮教会	井上和四郎
	0.2	東京第一基督教会	木全俊三郎
	0.2	同	明地八十八
	0.5	同	木下林蔵
	0.4	同	後藤和子
	(10ヶ月払)10	同	山崎トク子
	1	下総国東葛飾郡市川村	田中喜平太
1889.8.14	1	日本メソヂスト下谷教会々友	益田鳳
	0.5	同	益田キク子
	0.5	同	的場エイ子
	0.3	同	外山孝平
	0.25	駒込教会々友	温田経次郎
	0.2	同	無名氏
	0.2		佐々スゞ子
	0.2	同	波澤サダ子
	0.2	同	大熊ケイ子

	0.2	同	野村秀雄
	0.2	同	黛彌十郎
	0.2	同	原田定吉
	0.15	同	柴田金次郎
	0.1	同	神田精一
	0.1	同	佐久間芳造
	0.1	同	堀卯三郎
	0.1	同	江口次郎人
	0.1	同	井上汎
	0.1	同	須藤定吉
	0.1	同	岩淵總
	0.1	同	外山友諒
	0.1	同	外山作造
	0.1	同	外山ヌイ子
	0.1	同	山田ヨ子子
	0.1	同	青木榮四郎
	0.1	同	伊東テル子
	0.1	同	大澤正交 外一人
	0.13	同	鹽川セキ子
		同	佐藤亀吉
		同	羽原隨光
1889.9.18	20	東京府小石川	寺見勝之
	0.1	讃岐丸亀	齋藤シゲ
	0.1	同	青ミツ
	0.1	同	松村種男
	0.1	同	林保太郎
	0.2	同	久保シヅ
	0.2	同	青イク
	0.2	同	金子柳太郎
	0.2	同	林峯治
	0.15	同	同ユウ
	0.3	同	筒井英一
	0.3	同	林可彦
	0.2	同	同ハナ
	0.3	同	竹内ウタ
	1	同	井手義行
	0.1	多度津	今西サキ
1889.9.25	0.5	越後中條町	奥村忠吉
	0.2	同	西半次郎
1889.10.16	5	足利町貳丁目	G.Y.
1889.10.23	0.2	京都府丹波国天田郡福知山町	石田篤一郎
1889.11.6	3		秋田聖書之友会員
	50		横浜基督一致海岸教会
	(内訳) (3)		横正身

	(1.5)		岩間巳之助
	(1)		高根虎松
	(1.5)		熊野雄七
	(1)		齋藤菊藏
	(1.5)		林翁
	(0.1)		伊藤由太郎
	(0.5)		野口國之助
	(0.1)		中田勝藏
	(0.1)		小泉種太郎
	(0.2)		木島貞三郎
	(1)		鳥田多門
	(5)		北井要太郎
	(1)		西山仙太郎
	(1)		北島五郎右衛門
	(1)		稲垣信
	(1)		高橋葉
	(0.2)		加藤源四郎
	(1.5)		関川重吾
	(3)		日下部金幣
	(0.5)		中田新三郎
	(0.1)		峯村平五郎
	(1)		長聖道
	(1)		喜多幸知
	(0.1)		石田善吉
	(20)		柳下平治郎
	(0.5)		小川嘉太郎
	(0.5)		柴田文助
	(1)		柴田保吉
	(0.1)		佐藤太三郎
1889.12.6	1.05		足利一致講義所有志者
	(内訳) (0.2)		山口辰五郎
	(0.2)		鈴木繁藏
	(0.1)		土屋佐一郎
	(0.1)		長純一郎
	(0.1)		上野鎰藏
	(0.05)		無名氏
	(0.1)		加藤高直
	(0.1)		大島クメ
	(0.1)		愛々堂主人
1889.12.13	0.2	足利町雪輪小路	鈴木豊三
	0.2	飛驒高山町	保秋太郎
	0.1	同	船坂徳兵衛
	2.5		日本メソヂスト下谷教会(第二回募集高)

	(内訳) (1)		長野武一郎
	(0.3)		逸見逸■
	(0.2)		馬島渡
	(0.2)		加藤田三郎
	(0.2)		松尾推太郎
	(0.15)		辻徳三郎
	(0.1)		加藤新太郎
	(0.1)		大野芳次郎
	(0.1)		村松敏三
	(0.1)		人見きん子
	(0.05)		笈川きい子
	0.5	長崎県東彼杵郡佐喜保村	仁木康眞
1890.1.17	3	上州藤岡	横山三郎
	5	同	大戸甚太郎
	0.2	同	中村茂策
1890.3.21	1	信州諏訪郡四賀村	岩村周蔵
	10	上野国緑野郡神流村大字下戸塚	中山重兵衛
③女学雑誌			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.6.1	0.2	京橋区南伝馬町二丁目	落合よし
1889.11.30	3		第一高等中学校基督教徒青年会有志者
④大阪朝日新聞			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.5.1*	1	高松基督教会会員	須古はな
	0.5	同	一丸菊三郎
	同	大分県人在高松	無名氏
	0.2	高松基督教会会員	同
	0.1	同	同
	0.1	同	同
	0.2		同
	2	近江国長浜鉄道監督川邊直八内	きやう女
	0.5	伊予国温泉郡松山柳井町	伊藤正固
	1	摂津国西の宮	辰馬半蔵
	0.2	西区南畑江上通四丁目	吉田順
	0.1	同	吉田しづ
	同	河内国錦部郡原村	中尾又太郎

同志社大学設立支援の現実

	同	和泉国泉郡平井村	山本達三
	1	在福井	近重八潮彦
	0.5	同	林松茂
	同	同	大里直信
	1	同	高橋親瀾
	3	大阪基督有為会元愛深会取扱	湯浅元十郎
	2.35		大阪聖三一教会有志者
	0.2	大和国宇陀郡神戸村	津川三保次
	同	同 松山町	福田熊次郎
	同	同 神戸村	森田寅蔵
	3	住所不明	澤井基一郎
	同	同	磯田和蔵
	同	同	磯田復蔵
	0.5	同	宇田川竹熊
	0.3	同	徳岡すみ
	0.1	同	澤井のへ
	同	同	磯田奈良尾
	0.2	同	井岡萬一郎
1889.5.2*	0.3	大和国高市郡今井町	柴田嘉市郎
	同	同 古川村	村島奈良吉
	同	同 曾我村	青木正徳
	0.2	同 土橋村	岡橋次一
	同	同 曾我村	三谷元太郎
	0.15	同 新堂村	植田橋造
	同	同 曾我村	鎌田音吉
	0.1	同 曲川村	高垣嘉七
	同	同 出村	鎌田吉松
	同	同 今井村	服部俊三
	同	同 同	中澤佐十郎
	同	同 同	中澤直次郎
	同	同 同	谷田嘉七
	同	同 中曾司村	高木見庵
	同	同 同	松島常松
	同	同 土橋村	白井實
	同	同 小槻村	吉田藤太郎
	同	同 同	武村精一
	同	同 曾我村	今堀徳松
	同	同 同	後岡福四郎
	1	備中国小田郡笠岡村	柚木吉郎
	0.3	同 同	妹尾てい
	0.2	同 同	小川富太郎

	同	同 同	小野林太郎
	0.15	同 同	小見山八九三
	0.1	同 同	三木源吉
	同	同 同	小川なつ外一名
	同	同 同	小見山壽美外一名
	同	同 同	小川すい外二名
	1	同 同	辻喜平
1889.5.5	1	讃岐国高松基督教信者	森内徳佳
	0.2	同 同	野中勝次郎
	同	同 河内国河内郡松原村	高田弘毅
	同	同 六万寺村	日下富三郎
	1	摂津国西宮濱脇町	樋口門之介
	0.5	同 同	織居あさ
	同	同 同	岩本彦七郎
	同	同 鞍掛町	柴田久五郎
	0.3	同 濱東町	二階堂かう
	同	同 濱石才町	松本千之介
	0.2	同 濱東町	佐野信吉
	同	同 濱の町	古久保義兼
	同	同 濱久保町	五十田嘉吉
	同	同 濱石才町	田中いし
	同	同 同	石上きぬ
	同	同 鞍掛町	黒田善介
	0.1	同 濱久保町	山村永太郎
	同	同 石才町	豊崎惣平
	同	同 横道町	豊崎彦史
	同	同 鞍掛町	西山ちか
	同	同 濱久保町	篠原安次郎
	同	同 濱東町	小網信吉
	同	同 濱の町	松原習之進
	同	同 鞍掛町	藤井作兵衛
	同	同 濱東町	磯尾敬茂
	同	同 濱久保町	中居こま
	同	同 同	酒井すげ
	同	同 鞍掛町	紅野泰■
1889.5.12*	1		奥田かう
	1		木村じう
	1		角田とく・角田つる
	0.6		米田ます・吉弘なほ・山田しげ・村山小梅・草田くま
	0.5		三樹稔尾
	0.5		今西ゑん

	0.5	濱崎實			0.1	岡本まち
	0.5	津枝しづ			0.1	友枝あさ
	0.5	某二人			0.1	中馬しづ
	0.5	海野たま			0.1	杉野なる
	0.5	河本えい			0.1	勝守もと
	0.5	藤枝よし			0.1	奥野いく
	0.5	黒川君代			0.1	小林えい
	0.5	久松雪枝・久松鈴江・ 緒方つね・緒方よしや			0.1	岡澤ひで
	0.5	奥谷こと・杉山のぶ・ 吉井小春・平野いと			0.1	高田とめ
	0.3	浅井やす			0.1	濱名もと・濱名よね
	0.3	西村よう			0.1	吉井ひで・鞍馬いく
	0.3	角田久栄	1889.5.14	1 大阪		紅芳館
	0.3	谷まさ		1 大和国吉野郡 天川村		前田健藏
	0.3	中尾あさ		0.2 同 大塔村		増田重太郎
	0.3	山脇よね		0.15 同 同		坂口寅石
	0.3	堀内とよ		0.1 同 同		増田善三郎
	0.3	池田こと		0.1 同 同		泉井弘
	0.3	宮崎あい		0.1 同 同		御垣文吉
	0.3	児島あい		0.1 同 天川村		梅山義弘
	0.3	池田譲		2.4 同 大塔村		竹原九平外五名
	0.3	田宮ため・藤井かく・ 松野あや	1889.5.21	5 大和国添上郡 奈良町		織権六
	0.3	三橋たきえ		3 同		河井■
	0.25	今村かう		2 同		田中義忠
	0.2	吉本土江		2 同		山田常二郎
	0.2	寛とみ		1 同		前田克駒
	0.2	内田かう		1 同		藤井元壽
	0.2	岩根はな		1 同		日比野迪吉
	0.2	賀陽きく		1 同		宇佐美正忠
	0.2	清水えい		1 同		松井四郎
	0.2	芦田じゆん		1 同		大塚於菟麿
	0.2	大熊あさ		1 同		野間安親
	0.2	井上せん		1 同		伊東昴運
	0.2	西垣あさ		1 同		高野賢一
	0.2	山口まさ・竹山かつ		0.5 同		岡三次郎
	0.17	小北楠枝・柴田せん・ 中村かほる・中村たつ え・井上ちゑ		0.5 同		川崎芳太郎
	0.15	某三名		0.3 同		中山新
	0.1	永山まさ		0.3 同		橋本平三
	0.1	山本浪香		0.25 同		久保庄造
	0.1	中井かや		0.25 同		笹尾鶴二郎
	0.1	某二名		0.25 同		宇野義勇
	0.1	吉村梅野		0.2 同		川崎勝太郎
	0.1	河原とら		0.2 同		新林陸之助

同志社大学設立支援の現実

	0.2	同	野澤利義
	0.2	同	此村俊一
	0.2	同	駒井寛三郎
	10	同	九里寛行
	2		赤間ヶ関一致教会会員
1889.5.26	1	摂津国武庫郡 田宝塚温泉場 基督教信徒	藤野久次郎
	1	同	真田信胤
	1	同	田村善作
	0.5	同	藤野まき
	0.5	同	真田かな
	0.5	同	田村善右衛門
	0.5	同	景山頼次郎
	0.2	同	藤野種吉
	0.2	同	真田信義
	0.2	同	藤原たま
	0.1	同	池田善丸
	0.1	同	戸田萬之進
	0.1	同	吉田嘉市
	0.1	同	三宅英三郎
	0.1	同	武田徳兵衛
	0.1	同	木村柳三
	0.1	摂津国西成郡 川北村	佐野利兵衛
	0.1	神戸市下山手 通六丁目	福田千世
1889.6.16	5	備後国深津郡 深津村	石井英太郎
	1	大阪西区土佐 堀三丁目	小林はつ
	0.5	大阪北区常安 町	秋光止馬
	0.5	大阪南区安堂 寺町三丁目	島田伊兵衛
	0.3	大阪東区博労 町二丁目	武田末七郎外一名
	0.1	石見国横田村	松本仙太郎
	0.1	同 日原村	水澤直太郎
	0.1	同 中野村	世良祐四郎
1889.6.27	10	大阪市東区平 野町二丁目 大阪帯革製造 所	多木豊次・多木千吉
	1	大和国添下郡 岩室村	益海清風
	1	同 荒蒔村	中尾徳一郎
	0.5	同 同	吉川寅蔵

	0.5	同 新庄村	奥田岩五郎
	0.25	同 荒蒔村	井上権三郎
	0.2	同 前栽村	川口治道
	0.2	同 二階堂村	石川佐郎
	0.1	同 同	片岡権太郎
	0.1	同 同	片岡虎雄
1889.7.13	0.5	和泉国泉郡南 横山村	植林久五郎
	0.3	同 日根郡 日根野小学	目定造
	0.2	同 同	野口貞音
	0.2	同 同	神座松太郎
	0.1	淡路国津名郡 安平村	井上伊八
1889.10.30	10	伊予越智郡今 治本町	長島猪太郎
	5	同 今治村	伊藤静象
	3	同 今治米 屋町	宇佐美實太郎
	2	同 藏敷村	石原信樹
	2	同 今治本町	村上喜平
	2	同 今治中 瀬町	村上芳太郎
	2	同 今治室 屋町	阿部光之助
	2	同 米屋町 寄留	平野耕耘
	1	同 今治米 屋町	矢野常太郎
	1	同 今治室 屋町	富田實三
	1	同 藏敷村	富島格
	1	同 今治本町	矢野用助
	1	同 同	箱崎餘四郎
	1	同 今治中 瀬町	阿部武太郎
	1	同 今治風 早町	阿部平助
	1	大和山邊郡二 階堂村	道澤源一郎
	0.5	伊予越智郡今 治村寄留	森川貞亨
	0.5	同 藏敷村	林國平
	0.5	同 今治村	豊田正信
	0.5	同 喜多郡大 洲大洲町	高橋庄三郎
	0.5	同 同	神山峰雄
	0.5	同 越智郡今 治室屋町	矢野房太

	0.5	同 今治本町	小西芳太郎
	0.5	同 同	河合清三郎
	0.5	同 同	何某
	0.5	同 今治新町	沖精助
	0.5	同 藏敷村 寄留	西山巖
	0.5	同 今治村	長尾信高
	0.5	同 野間郡瀨 村寄留	友近義方
	0.3	同 越智郡藏 敷村	堅田慶重
	0.3	同 今治室 屋町	平野謙三
	0.3	同 同	吉田岩造
	0.3	同 今治片 原町	山田又助
	0.3	同 今治新町	木原忠七
	0.3	同 今治片 原町	赤尾理作
	0.3	同 今治本町	矢野續
	0.25	同 藏敷村	正岡七重
	0.25	同 今治村	堤長祥
	0.25	同 同	野間岩造
	0.25	同 同	丹下吉和
	0.25	同 今治村 寄留	矢野徳次郎
	0.25	同 今治本 町寄留	三宅克誌
	0.25	同 同	大野彌千馬
	0.25	同 喜多郡大 洲大洲町	在相常治
	0.2	同 越智郡今 治村寄留	松岡為利
	0.2	同 今治村	清水又六郎
	0.2	同 藏敷村	望月徳三郎
	0.2	同 今治中 瀨町	服部泉
	0.2	同 同	越智幸吉
	0.2	同 同	武本徳三郎
	0.2	同 今治風 早町	竹田吉平
	0.2	同 同	後藤榮吉
	0.15	同 今治村 寄留	木原儀一郎
	同	同 同	村上猛
	0.13	同 同	岡崎要賢
	0.13	同 同	鹽崎幾太郎
	0.13	同 藏敷村	吉田春雄

	0.11	同 今治村 寄留	伴孝雄
	0.1	同 今治新町	武田包太郎
	0.1	同 藏敷村	伊藤熊治
	0.1	同 同	井戸利惣太
	0.1	同 同	羽藤清太郎
	0.1	同 同	三宅清徳
	0.1	同 同	中村経満
	0.1	同 同	尼子正彦
	0.1	同 今治村	小林隣三郎
	0.1	同 同	岡崎次太郎
	0.1	同 同	檜垣清
	0.1	同 同	渡邊章
	0.1	同 同	羽倉重好
	0.1	同 同	本宮経石
	0.1	同 同	堀棟平
	0.1	同 同	小池高一
	0.1	同 同	堅田榮
	0.1	同 同	中野荘作
	0.1	同 同	天野儀一郎
	0.1	同 同	成瀬左一郎
	0.1	同 同	三浦清磨
	0.1	同 同	佐伯眞明
	0.1	同 藏敷村	青野小三郎
	0.1	同 同	石井良知
	0.1	同 同	眞木亀之助
	0.1	同 同	井戸眞之助
	0.1	同 同	保持正次郎
	0.1	同 同	末松露
	0.1	同 同	深谷俊長
	0.1	同 今治村 寄留	中村鼎之助
	0.1	同 今治風 早町	池田壽目太
	0.1	同 今治米 屋町	渡邊修
	0.1	同 同	宇佐美秀太郎
	0.1	同 同	阿部喜三郎
	0.1	同 今治本町	木村忠作
	0.1	同 同	品部豊三
	0.1	同 今治村 寄留	安野百太郎
	0.1	同 今治室 屋町	大澤文彦
⑤大阪毎日新聞			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.5.24*	1	備中国後月郡 井原村	柳本瀧三郎
	1	同	佐藤要吾

⑥中外電報			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.6.14	0.5	加佐郡元吉坂村	福村彌七
	0.2	同元泉源村	福西八右衛門
	0.2	同元鹿原村	森村莊右衛門
	0.2	同元安岡村	森田嘉久治
	0.2	同元市場村	村田福治
	0.1	同元田中村	上西研太郎
	0.3	同元下東村	辻本稲之助
	0.2	同上水間村	村本田七郎右衛門
	0.1	同東雲村	高山勇三
	1	同元中山村外三ヶ村	有志中
	1	同都岡田下村	多田松兵衛
	0.5	同上	村上平右衛門
	0.1	同上	有本六右衛門
	0.1	同上	荒木秀蔵
	0.1	同上	木村彦右衛門
	0.1	同上	森野庄次郎
	0.1	同上	追尾富三郎
	0.5	同元久田美村	有志中
	0.5	同元下染原村	和気安次
	0.3	同元岡田由里村	藤澤莊右衛門
	0.1	同村	今西治兵衛
	0.1	同元西方寺村	泉秀次郎
	0.5	同元登尾村	林次郎兵衛
	0.5	同朝来村	有志中
	0.2	同元登尾村	藤村伊平
	0.2	同元岡安村	■垣瀨左衛門
	0.5	同元今田村	波多野真部
	0.2	同上	村尾半兵衛
	0.5	同上	大谷保太郎
	0.2	同元堀村	櫻井延蔵
	0.2	同上	同吉松
	0.2	同上	保理江國蔵
	0.2	元布敷村	仲仲蔵
	0.2	同上	櫻井萬吉
	0.3	同元別所村	谷初治
	0.3	同元萬願寺村	山口嘉蔵
	0.3	同元丸田村	大田久兵衛
	0.2	同元八戸地村	森谷熊蔵
	0.2	同上	森谷
	0.2	同上	有志中
	0.2	同元八田村	同上
	0.2	同元丸田村	同上

	0.2	同元上東村	同上
	0.2	同元三日市村	同上
	0.6	同元上安久村	安久兵左衛門
	0.5	同元圓滿寺村	水島亀蔵
	0.5	同元下安久村	飯田豊蔵
	0.5	同元長濱村	江上圓吉
	0.3	同村	同仁右衛門
	0.3	同元和田村	岡田惣右衛門
	0.3	同元下安久村	飯田彌右衛門
	0.2	同元円満寺村	水島勘左衛門
	1	同元赤野村	安田藤太郎
	0.5	同元佐波賀村	齋藤久左衛門
	0.5	同元大野村	倉内藤太郎
	0.5	元大山村	岡山利左衛門
	0.5	元平村	半井新屋
	0.17	元中田村	有志中
	0.27	元河邊中村	有志中
	0.32	元西屋村	有志中
	0.13	同室井村	有志中
	0.14	同河邊由里村	同
	0.11	同觀音寺村	同
	0.4	同栃尾村	同
	0.26	同大山村	同
	0.52	同田井村	同
	0.2	同成生村	同
	0.77	同元原村	同
	0.7	同小橋村	同
	0.58	同元三濱村	同
	0.1	元多弥村	同
	0.33	元赤野村	同
	0.9	元平村	同
	0.55	佐波賀村	同
	0.43	元千歳村	同
	0.47	元大野村	同
	0.32	同瀬崎村	同
⑦日出新聞			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.5.1	2	上京区柳馬場丸太町下る	高松舜
	1	三条通小川西入る北川飯村哲之助方	池田平一郎
	1	寺町姉小路北入下本能寺前町四十三番地	吉田清七
	1	押小路堀川東入押堀川町	今西ます

	1	団栗六軒町四番戸	浅野篤
	1	木屋町三条上る十三番路次	小島勇
	1		豊田宗助
	0.5	室町上長者町南清和町廿一番戸	野原ぬい
	0.5	ラール子ア氏方	三宅菊子
	0.5	同	宮野花子
	0.3	下京元八組堀池町三十二番地	中村親義
	0.3		上月和彦
	0.3		小西策造
	0.2	寺町二条廿七番戸	吉田みつ
	0.2	下京元四組西魚屋町	西堀まき
	0.1	押小路新町	中島ゑい
1889.5.2	0.2	丹後国宮津	勝沼和多留
1889.5.19	0.5	岐阜県美濃国多藝郡押越村百三十四番地土族 医師	山口玄樹
1889.5.21	0.1	島根県石見国濱田町	石本傳次郎
1889.7.3	5	愛知県名古屋区本町四丁目	長尾徳三郎
	5	江州彦根	森拳石
	1.5	同	何某
	1	京都府相国寺藪下町	速水忠雄
	1	上京御池両替町東へ入半井澄方	藤原正吉
	1	上京今出川通新町角	高木清治郎
	0.6	愛媛県九黒村	林瀬菊吉
	0.5		小田時榮
	0.5	上京区元三十一組樺木町	藤井茂範
	0.5	盲啞院	野村宗四郎
	0.5	江州彦根	渋谷たけ
	0.5	同	服部久次郎
	0.3	同	栗田集
	0.3	京都府大峰団子町	高家善助

	0.3	盲啞院	木村彌助
	0.2	二条離宮後	神坂達夫
	0.2	江州彦根	村田某
	0.1	同	仙津つる
⑧神戸又新日報			
	掲載日	寄附額	居所・所属
	寄附者名		
1889.5.8	10	神戸	堀貞幹
	0.3	同	宮崎某
	0.5	神戸木村強内	藤田欽之助(但第二回目)
	15	神戸基督教会	木村強
	1	同	安藤イト
	0.15	同	渡邊源太
	0.1	同	岡本保次郎
	0.3	同	飯田クス
	0.1	同	小林ソデ(但第三回目)
	0.3	同	成瀬トシ
	0.3	同	伊藤廉吉
	0.3	兵庫切戸町	田口善次郎
	0.2	同	土師勝太郎
	0.2	同	小泉雄
	0.15	同	田中伝吉
	0.1	七美郡小代村	井上忠雄
1889.5.21	2	神戸坂本村	代言人 松本織五郎
	0.15	赤穂郡赤穂町字加里屋	杉丑夫
1889.6.5	0.5	神戸基督教会内	桑原作吉
	0.1	同	遠山峻二
	1		三木駒吉
	0.5		永井忠太
1889.7.10	0.5	神戸基督教会員	桑原作吉
	0.2	同	小林ソデ
	0.5	同	出村友吉
1889.7.24	2	兵庫三川口町	西野恵之助
	0.5	神戸坂本村	佐々木てる
	0.1	同下山手通七丁目	芹川信太郎
	0.1	諏訪山麓	天民居士
1889.10.8	2	神戸基督教会員	桑原作吉
	0.3	同	小林袖
	0.2	同	渡邊かめ

1889.11.5	1	出石郡	西山員直
	0.3	同	島村贊
	0.3	同	内蔵五郎
	1	同	今田禎次郎
	0.15	同	赤木敏太郎
	0.15	同	清水潔躬
	0.15	同	鳥居正文
	0.5	同	池口中恕
	0.15	同	瀬能又太郎
	0.1	同	小西欣三
	0.1	同	福富孝之助
	0.1	同	山地基矣
	0.1	同	西村政吉
	0.1	同	小塚牧造
	0.1	同	上杉幹
	0.15	同	笹谷松蔵
	0.1	同	中村重道
	0.1	同	白杉辰雄
	0.15	同	松村圓八
	0.1	同	田端義七
	0.1	同	西村一郎
	0.2	同	橋本覚造
	0.1	同	佐々木卯之助
	0.1	同	頼藤喜又郎
	0.15	同	小川重徳
	0.5	同	谷野孝
	0.2	同	志水六三郎
	0.3	同	弓削究
	0.5	同	河村又三郎
	0.2	同	山本豊左右
	0.1	同	平尾庫一
	0.1	同	川口勘輔
	0.1	同	田井敬助
	0.1	同	中山三良右衛門
	0.2	同	田邊忠右衛門
	0.5	同	岡崎茂左衛門
	0.1	同	松岡勤七
	1	同	山内仲蔵
	0.3	同	高山温
	0.3	同	山本森之助
	0.5	同	竹中茂恒
	0.3	同	松井旗二
	0.1	同	志水保太郎

	0.15	同	井上深美
	0.5	同	大森留次
	0.2	同	芦津常齋
	0.15	同	佐伯三良太夫
	0.1	同	佐伯石蔵
	0.1	同	横山峻
	0.1	同	小西峰吉
	0.1	同	中田秀齋
	0.1	同	山地智
	0.1	同	中澤益之助
	0.1	同	田中義矣
	0.1	同	川端富蔵
	0.1	同	浅村成章
	0.1	同	岸綱平
	0.1	同	高谷芳治郎
	0.5	同	五歩一小兵衛
	0.5	同	河野左源治
	0.1	同	富岡昌造
	0.1	同	柳川宗夫
	0.3	同	岡部久洋
	0.3	同	本間臬
	0.1	同	田中武吉
	0.2	同	長良三郎
	2	同	平尾源太夫
	0.5	同	平尾学太郎
	0.1	同	齊藤新右衛門
	0.2	同	井上金右衛門
	0.2	同	頼藤善太夫
	0.1	同	西村助太夫
	0.1	同	田邊友治
⑨福岡日日新聞			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.6.14	0.2	宗像郡	坂本六生
⑩北海道毎日新聞			
掲載日	寄附額	居所・所属	寄附者名
1889.8.29	5	浦河公会員	田中助
	5	同	和久山磐尾
	5	同	澤茂吉
	3	同	中澤儀平
	2.5	同	湯澤誠明
	1.5	在浦河札幌教会員	平野彌一
	1.5	浦河公会員	塚本新吉

	1	同	倉賀野栗
	1	同	森田久造
	1	同	関谷寅藏
	1	浦河郡浦河村	一柳平太郎
	1	同	原直五郎
	1	同	寺田三郎
	1	同	氏家文太郎
	1	同	山谷豊治郎
	1	静内郡有良村	西田玄二郎
	1	三石郡姨布村	小林正太郎
	0.5	浦河公会員	塚本ミチ子
	0.5	同	小田定五郎
	0.5	同	向井裕藏
	0.5	同	櫻井賢三
	0.5	同	小田竜太郎
	0.5	浦河郡浦河村	堺忠助
	0.5	同	間山久太郎
	0.5	同	小林藤兵衛
	0.5	同	西口吉左衛門
	0.5		日野香橘
	0.5		大久保確太郎
	0.5		内藤雄平
	0.5	浦河郡浦河村	佐藤平治郎
	0.5		西村次兵衛
	0.5		田中忠治郎
	0.5		田中仙次郎
	0.5		奥田惣兵衛
	0.5	浦河公会員	高田一造
	0.5	浦河郡荻伏村	原寅之助
	0.5	浦河村浦河村	小林壽作
	0.3	同	柏谷惣太郎
	0.3		西田左一郎
	0.3	浦河郡浦河村	宇野慶次郎
	0.3	同	木村義太郎
	0.3	同	京谷忠右衛門
	0.3	同	村田謙三郎
	0.3	浦河郡荻伏村	友田清太郎
	0.3	同	坂本直治
	0.3	同	古森和三二
	0.3	同	東松丈助
	1.5		山谷覚治郎・畑中専太郎・宮村虎治郎・嶋元助・照井祐助
	0.25	浦河村浦河村	古田五

	0.25	同	後藤嘉太郎
	0.2	浦河公会員	川越九八郎
	0.2	同	荻田鐵太郎
	0.2	同	梅田才助
	0.2	浦河郡荻伏村	小林利七
	0.2	同	大賀八百造
	0.2	同	近藤浪治
	0.2	浦河公会員	吉田重右衛門
	0.2	同	小林喜三郎
	0.2	同	占部重藏
	0.2	浦河郡浦河村	佐藤金治
	0.2	同	北村精一郎
	0.2	同	大澤祐順
	0.2	同	音瀬忠右衛門
	0.2	同	高木新三郎
	0.2	同	梶山慶時
	0.2	浦河公会員	服部直一
	0.2	浦河郡浦河村	小島貞三
	0.2	三石郡姨布村	池田郁
	0.2	浦河郡浦河村	京谷左右吉
	0.2	同	宮房五郎
	0.2	浦河郡荻伏村	齋藤作治
	0.15	浦河郡公会員	三好宇太治
	0.1	同	川越なつ
	0.1	浦河郡浦河村	熊澤三之助
	0.1	同	荻田良太郎
	0.1	同	小中庄七
1889.9.10	0.5	浦河郡浦河村	山谷橋次郎
	0.5	同	三浦忠吉
	0.5	同	西川吉貫
	0.5	同	荒木清吉
	0.5	同	久富治吉
	0.5	浦河郡後邊戸村	池田延太郎
	0.5	浦河郡後荻村	宮崎増兵衛
	0.3	同	佐藤福藏
	0.3	浦河郡浦河村	福島耕叟
	0.3	同	北川貞七
	0.3	同	石川伊之吉
	0.2	同	柳澤春弘
	0.2	同	石川幸吉
	0.2	浦河郡後荻村	黒瀬甚作
	0.2	同	藤原由三郎